



〈連載(308)〉

## 沖縄・宮古島の船ぶね



大阪府立大学21世紀科学研究センター  
特認教授 池田 良穂

前回の本コラムでは、沖縄の宮古島に押し寄せる、中国からの大型クルーズ客船の話題を現地レポートとしてご紹介した。これらのクルーズ客船の寄港により、それまで40万人程度だった宮古島への観光客が倍増しており、さらなる増加も期待され、港湾施設の拡充、受入観光地の開発、2次交通の整備などが行われている。

沖縄本島と台湾との間に位置する、宮古島と、石垣島を中心とする八重山諸島は、先島諸島と呼ばれて、かつては沖縄本島から琉球海運と有村産業の旅客船が就航していた。

最初に宮古島を訪れたのは、40数年前で、まだ大学生の頃だった。大阪から関西汽船の「波之上丸」で那覇港に着き、那覇の泊港からは有村産業の「八汐丸」に乗り、宮古島に降り立った。私事になるが、亡父が軍医として宮古島で終戦を迎えて、お世話になった村の人々にお礼を言ってきて欲しいと頼まれたのが宮古島で下船した理由だった。訪れた村では、大歓待を受けて、バイクの後ろに乗せてもらって島内の観光スポット

を案内してもらった。



40年前に、著者が那覇から宮古島まで乗船した貨客船「八汐丸」



宮古島から石垣島までは琉球海運の「宮古丸」に乗船した。

それ以降、船および飛行機で宮古島を数回訪れたが、石垣島に比べると観光地とし

【最近建造した共有船】



6500m<sup>3</sup> 白油タンカー「第11霧島丸」



2180m<sup>3</sup> 白油タンカー「みち丸」



999G/T LPGタンカー「第三内海丸」



5600m<sup>3</sup> 黒油タンカー「幸秀丸」



2517m<sup>3</sup> 黒油タンカー「第93芳鷹丸」



2510m<sup>3</sup> 白油タンカー「新幸丸」



2510m<sup>3</sup> 白油タンカー「泰洋丸」



2475m<sup>3</sup> 白油タンカー「大鷹丸」

では地味な印象をもっていた。また船好きの私としては、那覇からの旅客船運航が廃止となり、そして周辺の離島との間に宮古島本島からつぎつぎに橋が架かって離島航路の船便も少なくなり、平成27年には伊良部島との間にも橋が開通して、平良港と伊良部島の佐良浜漁港とを結ぶ高速船とフェリーが廃止となってからは、訪れることもなくなってしまった。

船ファンとしては離島航路の廃止は寂しいが、島民にとっては、橋が架かったことにより離島苦が解消されて安定した生活ができるようになったことは素晴らしいことだろう。

時々、珊瑚礁のコバルトブルーの海上に建設された長い海上道路が商業的に登場すると、つい食い入るように見えてしまうが、ここに旅客船が浮かんでいればと、つい思ってしまう。

現在、宮古島の周辺離島で、まだ橋が架かっておらず、旅客船が運航されているのは、多良間島と大神島の2島で、多良間島には旅客カーフェリー「フェリーたらまゆう」が、大神島には小型旅客船「スマヌかりゆす」が就航している。厳密には、多良間島の近くに小さな水納島(みんなじま)があるが、住民が1家族5人だけのため、定期便は就航していない。

「フェリーたらまゆう」は、合資会社である多良間海運が運航しており、宮古島の平良港を朝に就航し、夕方に戻るスケジュールで週6往復運航されている。同船は2007年に清水の三保造船所で建造され、457総トン、全長64.95m、幅11.6m。旅客定員は250名で、大型車6台と乗用車5台を積載

できる。航海速力は17.2ノット。運賃は旅客が2,470円、5～6mの乗用車で43,930円と結構高い。こうした橋の架けられない離島については、公共の海上道路とみなした施策なしには、このように交通費も高くなり、島の過疎化は進むばかりだ。

同船は、宮古島の本島と伊良部島を結ぶ海上道路の下を通過して多良間島に向かう。宮古島に到着した夕刻に、平良港に戻る同船を伊良部島の海岸から、また翌朝、多良間島に向かう姿を橋の上から撮影することができた。



伊良部大橋の下を通過して平良港に向かう「フェリーたらまゆう」



多良間島に向かう「フェリーたらまゆう」

もうひとつの離島である大神島へは、大神海運が旅客船を運航しており、宮古島の島尻港から毎日5往復出ている、航海時間はわずか10分。大神島は人口が30人弱と

いう小さな島だが、海岸には奇岩が点在しているというパワースポットとなっている。

船は「スマヌかりゆす」で、2010年、瀬戸内クラフトでの建造。船名の「スマヌ」は「島の」、「かりゆす」は「縁起の良い」の意という。15総トン、旅客定員60名、航海速度14ノット。沖縄県離島海運振興株式会社が建造して、大神海運に5年リースで貸し出す形となっているので、すでに大神海運の所有船になっているのだろう。運賃は350円とリーズナブル。島には宿はないが、「おぶゆう食堂」という食堂が1軒だけあり、特産の「カーキダコ」も食べることができる。



大神海運の「スマヌかりゆす」。小型船ながらユニークな美しい形状が碧い海によく似合う。

かつて宮古島本島と伊良部島を結ぶフェリーと高速旅客船を運航していたはやて海運が、平良港を起点とするデイクルーズ船「モンブラン」の運航を始めている。朝、昼、夜の3便のクルーズが行われており、食事が楽しめるレストラン船で、かつ船底にはガラス窓があって珊瑚礁の海中を居ながらにして楽しむことができる。

さて、旅客輸送は航空機が担うようになり、那覇だけでなく、東京、大阪等からの直行便も開設されて、那覇から先島諸島へ

の旅客船は姿を消した。そして唯一の海上からの訪問客が、クルーズ客船の乗客となっている。「モンブラン」には、クルーズ客船で来る乗客にもぜひ乗船して楽しんでほしいが、15万総トンの大型クルーズ客船「ゲンティン・ドリーム」が寄港中にもかかわらず、ランチクルーズには、クルーズ客らしき人は見かけず、みな日本人だった。



レストラン船「モンブラン」



「モンブラン」の船底の海中展望窓。珊瑚礁や、熱帯魚、そして海亀の姿も見えた。

先島諸島への貨物輸送は、小型コンテナ船とRORO貨物船が担っている。

琉球海運は499総トンの一般貨物船「優昭丸」で那覇と宮古・石垣島の週3往復の定期便と、RORO貨物船「みやらびⅡ」と「ちゅらしま」による、博多、鹿児島、那覇とを結ぶ週2回寄港の定期便を運航してい

る。

特に、「みやらびⅡ」は、週1回、台湾の高尾にまで足を延ばして、台湾との貿易貨物および高尾港で日本へのトランシップ貨物の輸送に従事している。これまで、沖縄への貨物は、多くが本土からの流入だったため、高い輸送コストが地域産業の活性化に影を落としていたが、日本列島の南西端に位置する先島諸島そして沖縄本島が国際航路で結ばれることによって、貨物の流れが変わり輸送コストの低減にも寄与することが期待されている。

また南西海運は、4隻の小型コンテナ船「よね丸」、「なんせい丸」、「せつ丸」、「第1せつ丸」で、沖縄本島的那覇/中城と先島諸島を結ぶ航路を週5便で運航しており、一番大型の1488総トンの「せつ丸」は週1便で、中国の厦門と台湾の高尾・基隆を結んでいる。

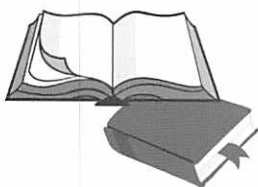


伊良部大橋の下を通過する南西海運のコンテナ船「よね丸」。



琉球海運のRORO貨物船「ちゅらしま」。博多、鹿児島、那覇と先島諸島を結ぶ。

会社案内カタログ、製品紹介パンフレット、社史など製作致します。



レイアウト、デザインなど、全てお任せ下さい。

ご相談は小誌まで

電話 078-331-3860



## 古野電気

### Meteorological Technology World Expo 2017 に出展 気象観測や地盤変位観測による防災監視ソリューションを紹介

古野電気株式会社(本社：兵庫県西宮市、古野幸男社長)は、10月10日(火)～12日(木)にオランダ・アムステルダムで開催された気象関連技術分野において世界最大級の国際展示会「Meteorological Technology World Expo 2017」に出展した。

この展示会は、気象の予測技術や分析、測量、サービス等、気象関連の最新技術を一堂に集めた国際展示会で、同社は、気象観測システムとして世界最小・最軽量級の小型Xバンド二重偏波ドップラ気象レーダー「型式：WR-2100」の展示と、新しい小型Xバンドドップラ気象レーダー「型式：WR110」を参考出品として初披露した(2018年春の販売予定)。また、微小な地盤変位を3次元で計測するGNSS自動変位計測システム「DANA」を展示した。

気象観測システムについては、空港や下水道、都市部、高速道路などでの局地気象観測の有用性を示す国内外での観測事例を紹介。また、「DANA」では、地すべり監視や建設工事現場、ダムなどで活用されているmmオーダーでのGNSS三次元変位計測の特長や利点などを、来場者へ説明。



小型Xバンド二重偏波ドップラ気象レーダー「型式：WR-2100」の設置例

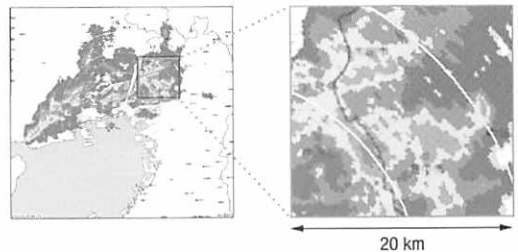


GNSS自動変位計測システム「DANA」の設置例

◇気象観測レーダーのラインナップを拡充  
新型の気象観測レーダー「型式：WR110」  
を開発



「型式：WR110」のアンテナ設置作業イメージ



観測データの表示例

同社は、2013年から防災・監視ソリューション事業として気象観測システム分野に